

タリアの伝統的な民衆笑劇。我が国では仮面劇と呼ばれることもある。この劇には、仮面をかぶらない色男役、色女役、仮面をかぶる老人役、道化役の四つのパートがあるが、ことに重要な役割を果たすのは、パンタローネを中心とする老人役と、アルレッキーノなどを中心とする道化役である。このコンメディア・デ・ラルテは、フランスのモリエールをはじめ、ヨーロッパの演劇にさまざまな影響を与えたほか、アンデルセンの『絵のない絵本』にもその素材を提供しているが、一八世紀以降、人形劇にも取り入れられて子どもとの関係も強まっていった。イタリアを代表する児童文学作品『ピノッキオの冒険』も、コンメディア・デ・ラルテをその土台としていて、色女役のロザウラや道化役のアルレッキーノなどの名も、そのまま登場するほか、そのつながりはずと深い。

(安藤美紀夫)

サ

細木原青起

さいき せいぎ
せいき

一八八五—一九五八(明18—昭33)

漫画家、漫画史研究家。岡山生まれ。本名辰江。日本美術院修了。一九〇七年の「日韓併合」前後に、京城にいて、鳥越静枝の名で、漫画家として活躍。とくに、「朝鮮バック」の漫画はほとんど一人で描くほどの健筆家。〇九年、日本に戻り、以降「東京バック」のほかで風俗漫画や政治漫画を描く。また、ユーモア小説の挿絵なども巧みであった。二四年に著した『日本漫画史』は、鳥羽僧正から大正時代までを概観した、日本漫画史の嚆矢的な書物。

(日高敏)

西郷竹彦

さいけい ちくご

一九二〇—(大9—)

文芸学者、

児童文学作家、露文学者。鹿児島県生まれ。東京大学応用物理学科卒。現在、文芸教育研究協議会(文芸研)会長。幼稚園、小、中、高、大学での文学教育実践を通して、教育と結びついた文芸学を構築し、『西郷竹彦文芸教育著作集』全三巻(一九七五—八二)として大系化された。翻訳にクドリヤシェフ編『文学の教授』(六四)などがある。著作集の完結によって、国語教育(とりわけ文学教育)に大きな影響を与えている。教室で文学作品を鑑賞する際、児童・生徒に文章に即してイメージ化や意味を追求させることになるが、文芸学(視点論・形象論・構造論・人物論・典型論・主題論・象徴論・文体論・虚構論など)によって、あいまいさを排除した説得力のある読みを引き出し、豊かに深く文学作品を享受する道を拓くことになった。一民間人が教育実践を通

して構築しかつ国語教育現場に大きな影響を及ぼす教育理論はかつてなかったものであり、その面からも特筆される。

(萬屋秀雄)

西条ふたばこ さいじょう ふたばこ 一九一九ー(大8ー) 詩人。本名嫩子。長く三井ふたばこの名でも作品を発表。

東京都に生まれる。西条八十の長女。日本女子大学校英文科卒業。在学中から詩誌「蠟人形」などで活躍。

戦後は詩誌「ポエトロア」を発売し作品を発表。詩集

に『後半球』(一九五七)、『空気の痣』(六八)などがあり、児童文学作品としては、『童謡集』(七二)などがある。

一九六〇年には、高澤ときをらと童謡誌「どうよう」を発売している。そのほかの著書に『父・西条八十』(七五)、『父西条八十は私の白鳥だった』(七八)などがある。

西条八十 さいじょう やそ 一八九二ー一九七〇(明治25ー昭和45) 詩人、童謡詩人、歌謡作詞者。東京市牛込区に生まれる。

早稲田大学英文科卒業、東京大学国文科にも通う。父重兵衛は明治の石鹼業界の草分けで富裕であったが、家庭的には冷たかった。早大在学中に日夏耿之介らと「聖盃」(のちに「仮面」と改題)を創刊。また三木

露風らと「未来」を創刊する。父の死後、兄の放蕩で一家の生活は八十の上にかかって重い負担となった。

一九一六年に結婚し、新橋で「天三」という天ぷら屋を開いたり、兜町通いもする。そこへ鈴木三重吉から

創刊されたばかりの「赤い鳥」(一九一八・七)に童謡を書くように従彦され、最初の童謡『忘れた薔薇』を一〇月号に、一二月には『かなりや』を発表する、『かなりや』は、成田為三の曲を得て近代童謡の代表作の一編として全国に流行。翌年の一九一九、処女詩集『砂金』を出版、その幻想的象徴詩は、詩壇に独自の地歩を占めた。同年『童謡私見』を『大観』に発表し、北原白秋との間に論争が起こる。八十はこの年の八月号限りで「赤い鳥」を去って「童話」に移り、作品活動をする

とともに童謡の選者になり、金子みすゞ、島田忠夫らの新人を世に出す。以来四年間、白秋、野口雨情とともに童謡界を三分することとなった。二四年『西条八十・童謡全集』一卷を出版。この童謡集は同書で「私が今まで書いた童謡の殆んど全部を採録した」と記しているように、八十の童謡作品一三八編の集大成したものである。この一冊に八十の童謡は集約されているといつてよい。一三八編の童謡は素材別に一六パートに分けられており、巻頭の『思慕と追憶』八編および『未知の世界』七編に八十の童謡の特色を色濃く描き出している。同時に巻末の『訳語集』一七編も、ロゼッティをはじめとする外国の童謡を日本に紹介した最初のものとして意義深い。八十の童謡の特色や考え方は、童謡論集『現代童謡講話』(二四)や『童謡作り方と味はひ方』(二七)によく示されているが、一口にいつて幼時

の情緒とその幻想表現に大きな特質がみられる。ほかに、童謡や少年少女詩に関する著書として『世界童謡選集』（二四、水谷まさる共訳編）、『少年詩集』（二九）、『少女純情詩集』（三三）ほかがある。詩集に、『見知らぬ愛人』（二二）、『美しき喪失』（二九）、『一握の玻璃』（四七）、『静かなる眉』（二〇）ほか多数ある。また、晩年近くになって『アルチュール・ランボオ研究』（六七）が出版された。二八年『当世銀座館』『マノン・レスコーの唄』の作詞によって中山晋平とコンビを組み、翌年同じコンビで日活映画『東京行進曲』の主題曲をつくり、たちまち二五万枚のレコードが売れ、歌謡曲の作詞家としても斯界の第一人者となった。六〇年、上野不忍池畔に「かなりや」の詩碑が建つ。

『鸚鵡と時計』^{おうむと} 西条八十の第一童謡集。一九二一年、赤い鳥社刊。挿画清水良雄、加藤まさを。所収作品五九編。これらは「主として『赤い鳥』及びその他の雑誌新聞のために筆を執つたものとなるべく創作の順序に配列したもの」。また序には「童謡詩人としての現在の私の使命は、静かな情緒の謡^{うた}によつて、高貴なる幻想、即ち叡^{インレクチュアル}智^{ライデナショナル}想^{イマジネーション}像を児童等の胸に植えつけることである」といったさまざまな八十の童謡観が華麗に詩的に映しだされていて意義深い。

【参考文献】藤田圭雄『西条八十解説』（一九七八『日本児童文学大系8』 ほんぷ出版）

（吉田定一）

再創造^{さいぞうぞ} 昔話・伝説などの原話の中にあるテーマやモチーフにヒントを得て作家が行う創作のこと。再話が原話に寄り添う形で行われるのに対して、再創造はむしろ作家自身のテーマに即して作品の世界を展開する。具体的な作品として木下順二作『夕鶴』や、松谷みよ子作『龍の子太郎』『鯉女房』などがあげられよう。児童文学における伝統の継承と創造を考える上で再話とともに重要な分野である。（吉沢和夫）

斎田 喬^{さいだ たかし} 一八九五—一九七六（明28—昭51）児童劇作家、画家。香川県丸亀市生まれ。祖父は旧京極藩士、父は製菓業を営む。姉五人の末の男子として生まれたので、父母、姉たちに愛されて育つ。丸亀中学から京都高等工芸に入学、油絵を学んだが、二〇歳の時父の病氣のため中退して、香川師範二部に学ぶ。ここで英語の教師をしていた小原芳芳の知遇を得る。丸亀市の小学校に勤めた後、一九二〇年、小原に招かれて、東京の私立成城小学校の教師となる。ここで美術の教師として、山本鼎らの提唱する自由画教育を実践、一方、二一年に創刊された成城小学校編集の児童雑誌『児童の世紀』の編集を担当、この雑誌に毎号脚本を発表して、成城小学校の学校劇運動に、脚本作者の立場から中心的役割を果たすことになる。二一年一月に成城小学校ではじめての学校劇の発表会を開いたが、大正期の芸術教育運動の高揚機運を背景に、二〇

○名もの参加者が全国から集まり、大成功を収めた。この時上演された六本の作品のうちの半数は斎田の作品で、その一つ、のちに『雀のお医者』と改題された『めくら雀』は、彼の代表作となった。その後、彼はおびただしい数の学校劇脚本を出版するが、この『雀のお医者』(一九二二)が処女出版だった。斎田は成城学校劇の脚本作者としてだけでなく、画家や童話作家としても多彩な才能を発揮し、児童図書の装丁や挿絵にも活躍、イギリスの挿絵画家ビアズリーの影響を思わせる幻想的画風で、児童出版美術史上からも注目される仕事を残した。しかし、彼の仕事の本領は、やはり子どものための脚本作家という点にあったといっていだろう。二四年には、一般に「学校劇禁止令」として知られている岡田文部大臣による学校劇への禁圧措置が取られたことから、一時は大正期芸術教育運動の花形のような隆盛をみせた学校劇も、たちまち下火になるが、沢柳政太郎創設の成城小学校への影響は、ほかの公立校とは違うものがあり、成城では、三一年五月に新橋の仁寿講堂を会場に斎田の成城学校劇一〇年を記念して、彼の作品ばかり六編を上演する、校外に進出している「学校劇の会」を開いている。『蝶になる』『釣られる』『子ぎつね』などの、ここで上演された作品は、彼の初期の仕事をまとめた児童劇集『蝶になる』(三二)として、この時に刊行されている。またこの発表

会は、その後の我が国の学校演劇運動に大きな影響を与えたことでも知られる。その後の演劇教育運動の一つの源流となった。当時、東京の公立小学校の教師だった加藤光、^{*}落合聰三郎らの「学校劇研究会」は、これが刺激となつて三二年に設立された。戦前戦後の長い年月にわたつて、数百編にのぼる学校劇の脚本を書き、後進を育てた貢献は大きく、六七年には郷里の香川県丸亀市に斎田喬文学碑が建てられ、主要作品を集めた『斎田喬児童劇選集』八巻(五四・五五)は芸術選奨文部大臣賞を受けている。歿後そのドラマツルギーの聞き書きを二人の弟子がまとめた『斎田喬・児童劇作十話』(八〇 西村松雄・養田正治編)が刊行された。

「蝶になる」^{なるとうに} 児童劇集。一九三一年刊。斎田には初期の学校劇の脚本一編を梁田貞作曲の楽譜とともに一冊にした『雀のお医者』があり、それが処女出版だが、この『蝶になる』(玉川学園出版部)は、標題の脚本をはじめ、彼が香川県から上京、成城の学校劇のために書いた初期の代表作二一編を収めており、おびただしい数にのぼる彼の作品集の中での代表作集とよんでよい一冊である。『子ぎつね』『四辻のジャック』『釣られる』など、その後の学校劇脚本に大きな影響を与えた作品群が収められている。

斎藤秋男^{さいとうあきお} 一九一七(大6) 中国文学者、中国教育研究家。東京都に生まれる。東洋大学

卒業。北海道大学助教を経て、現在、専修大学教授。中国文学研究会に参加し、早くから現代中国文学を紹介した。また『中国現代教育史』（一九七三）などを著すとともに、教育者の目で中国の児童文学を捉え、紹介しているのは特筆に値する。児童文学関係の訳書に『中国名作選』（五三）、『同級生ものがたり』（六四）などがある。

（中島久美子）

斎藤惇夫

さいとう ちかお

一九四〇（昭一五） 児童文学作家。新潟市に生まれる。立教大学法学部卒業後、電機関係の会社就職。のち退職して、福音館書店に入社、現在に至る。石井桃子、瀬田貞一などと出会い、児童文学への関心を深め、一九七〇年に長編ファンタジー『グリックの冒険』を出版して注目を浴びる。シ

マリスのグリックが新しい家を求めて冒険を続ける話だが、スケールの大きい本格的ファンタジーとしての魅力をもつ。続いて七二年に発表した『冒険者たち』も台所の床下に暮らしていたガンバが、旅に出てイタチ一族と戦う長編物語。いずれの作品も愛と自由に満ちた楽しい物語でありながら現実の人間と社会を巧みに象徴させているところに、子どものみならず若者たちの心までも捉える。ほかに『ガンバとカワウソの冒険』（二九八二）もあるが、作品の数はきわめて少ない。しかし、西欧的ファンタジーを消化した新しいファンタジー作家として独自の個性を備えている。（西本鶏介）

斎藤五百枝

さいとう いほえ

一八八四—一九六六（明一七—昭四一）挿絵画家。千葉県に生まれ白馬会研究所を経て東京美術学校洋画科卒業。美校在学中白馬会一〇周年記念展に『夕陽』入選。卒業後芸術作品としての染色制作に力を入れていたが、一九一四年『少年俱樂部』創刊号

表紙絵に起用され、以後同誌の表紙絵、口絵、挿絵で活躍、豪放・質朴な画風に豊かな素描力で高い声価を得た。コンテを使用した挿絵が多く、少年雑誌の画家中大きな特色を示した。代表作に佐藤紅緑の少年小説『あゝ玉杯に花うけて』（一九二七）、『少年讃歌』（一九二八）などの挿絵、大仏次郎の少年小説『山嶽党奇談』（二八）、『花丸小鳥丸』（三九）の挿絵などがある。『少年俱樂部名作選（絵画編）』（六七）に主要な作品が収められている。

（渡辺圭二）

斎藤佐次郎

さいとう じさろう

一八九三—一九八三（明二六—昭五八）編集者、翻訳家、出版人。東京市本郷区（現文京区）根津

の富家に長子として生まれる。早く父、ついで母を亡くす。早稲田大学英文科卒。『金の船』『金の星』を創刊したのが一九一九年一〇月（一九一九・一一月号—一九二〇・七月号。二二・六月号で改名）。同誌によって大正期児童文化運動誌、文芸誌のスタイルは完成されたと考えられ、類似誌の中で最多部数を数え、同期では最も長命である。斎藤は編集・刊行のかたわら投稿童話、綴方選のほか、創作、訳述も行った。訳業は三宅房子

名『家なき子』(二三)を代表とする。その間、野口雨情詩・本居長世曲『童謡曲譜集』や沖野岩三郎『童話読本』などを出版。大正末・昭和はじめの円本合戦には『世界少年少女名著体系』などをもって加わり、代表的児童文学出版社となった。一時は経営危機に瀕したが三五年ごろには再起。戦後復興して八一年に会長。生涯は文学史・出版史ながらである。雨情をはじめとして人材を身近において発掘、顕彰した功績、謙遜で剛直な人となりによって敬愛を集めたこと、ともに忘れ難い。

(宮崎芳彦)

斎藤信夫 のさいとう 一九一〇―八七(明44―昭62) 童謡詩人。千葉県山武郡南郷村に生まれ、一九三六年千葉師範専攻科卒業。卒業後千葉市内の小学校教員となり、地元の教員で作詞家だった市原三郎と知り合い童謡の作詞をはじめ。処女作品は『お猿とからす』。終戦直後に発表した『里の秋』(戦時につくった『星月夜』を作曲家海沼実の求めに応じて改作)により一躍有名になる。そのほか『蛙の笛』『母さんたづねて』『夢のおそり』『夢のお馬車』などがある。

(天畑祥子)

斎藤博之 のさいとう 一九一九―八七(大8―昭62) 画家、児童出版美術家。旧満州に生まれる。帝国美術学校洋画科卒業。卒業と同時に応召中国、フィリピンに転戦。戦後はタブローと並行して児童出版美術の仕事に携わる。また水墨画にも手を染める。代表作には絵本

『しらぬい』(七〇) たかしよいち作、講談社出版文化賞絵本賞受賞、同『がわっぱ』(七一) たかしよいち作、小学館絵画賞受賞)があり現代で最も幅広い活躍を続ける画家の一人だった。ほかに『河童百態』『河童曼陀羅』『日本国河童大全』などの水墨画集がある。(小西正保)

斎藤隆介 のさいとう 一九一七―八五(大6―昭60) 児童文学作家。本名隆勝。東京都渋谷区青山に生まれ、早稲田大学附属第一高等学院を中退、山本有三を慕って明治大学文芸科に入学。『ゴリーキイについて』を卒論として同校を卒業。一九三八年、雑誌記者を経て北海道新聞社に入社、小樽支社配属となり港湾記者を務める。四五年七月、秋田へ疎開、秋田魁新聞社会部デスクとして入社。少年時代より作家を志し、早大高等学院時代、佐井東隆のさいとうのペンネームで毎日新聞・日本赤十字社共催の映画ストーリー募集に応募、『赤十字に捧ぐ』が一等に入選。その翌年、日活で『心の花束』として映画化された。戦後はNHK秋田放送局の台本を大槻大介のさいとうの名で執筆。このころ、花岡事件の取材に秋田を訪れた版画家滝平二郎と知り合う。五〇年、友人、喜田説治主宰の『秋北中学生新聞』(四月)にはじめて斎藤隆介の筆名を用いて短編『八郎』を発表。翌々五二年、雑誌『人民文学』四月号に転載された。五八年、秋田より帰京、新制作座文芸演出部嘱託を務めるかたわら山本夏彦主宰の雑誌『室内』に職人の聞き書きを

九年間にわたって連載。のちこれをまとめたのが『職人衆昔ばなし』(一九六七)、『続職人衆昔ばなし』(六八)である。六三年一月一日号から六七年四月まで、日教組機関紙『教育新聞』に毎月一編、短編童話を連載。これをまとめて出版したのが処女話集『ペロ出しチョンマ』であり、翌六八年には第一七回小学館文学賞を受賞した。六九年には脳血栓に倒れながらも長編『ゆき』を発表。以後、『ちようちん屋のままッ子』(七一 第一八回サンケイ児童出版文化賞)、『天の赤馬』(七六 第一八回日本児童文学者協会賞)などを発表。高度成長に酔いしれる当時の児童文学会に大きな衝撃を与えた。一口にいえば、強靱な優しさをうちに秘めた剛毅の文学であった。秋田時代に知り合って以来の僚友、滝平二郎と組んだ絵本『八郎』(六七)、『花さき山』(六九)、『モチモチの木』(七一)などもよく知られている。『八郎』^{はち}は 一九六七年。隆介文学における短編の本領はすべて『ペロ出しチョンマ』、『立つてみなさい』(二九六九)の二冊の中に発揮されているといつてよい。中でも『八郎』は隆介三三歳の時はじめて発表した作品(五〇・四「秋北中学生新聞」、五一・四「人民文学」に転載)という意味でも、またその後の斎藤文学の主題がきわめて象徴的に凝縮されているという意味でも、彼の代表作の一つたるを失わない。八郎は含羞の巨人である。ある嵐の日、ふもとの村の子どもが遠い海を

指さして泣きわめいているのをみて、自分がなんでもこんなに大きく大きく育ってきたのかを悟るのである。八郎は渾身の力を込めて山をかつぎ海に沈め津波を防ぐ。それだけでは足りなくて、ついには自らの身をも逆浪を押し返して海中に沈めるのである。斎藤文学が終始変わらずも続けたのは民衆への限らない献身という主題であった。

(小西正保)

斎藤了

^{りょうとう} 一九二一

— (大¹⁰) —

児童文

学作家。樺太(サハリン)生まれ。戦後、日本童話会、山

本和夫らの同人誌『トナカイ村』で活躍する。一九五九年、理論社の児童書の第一冊目としてアイヌの勇壮な生き方を描いた『荒野の魂』を出版。その後の作品に短編集『土の花』(二九六四)、『せんにんのひみつ』(六七)、『ぼくはおとなに』(六八)、『うそつき大作戦』(七〇)、『とべとべホテル』(七三)、『へびりが池のなぞ』(七五)、『金色のかも』(七六)、『三平旅ものがたり』(七六)、『春の風花』(七七)、『まひるのへんしん』(七八)などがある。この作者の個性を最もよく示しているのは『土の花』で、真の英雄とは何かを追求した『ふたりの英雄』、養老の滝の伝説を素材に、ただの水を本物と偽って政治に利用する帝を皮肉った『二つの嘘』、土師親子がおかみにさしあげる埴輪に尿をかけて抵抗する『土の花』などに、反時代的なヒューマニズム精神が格調高く描かれている。

(西本鶏介)

崔南善 さいなんぜん → チェナムソン

サイモント マーク Marc Simont 一九一五ーアメリカの絵本画家。スペイン人の両親の間にパリで生まれ、パリ、バルセロナ、ニューヨークの間を歩き来して育つ。絵が好きでパリの画塾に学び、フレスコ画も修得。その後ニューヨークの国立デザイン・アカデミーで学ぶが、画家の父親から教えられるところが多かった。アメリカに定住、一九三九年ごろから児童書の仕事に携わる。『はなをくんくん』（一九四九）や五七年度のコールデコット賞受賞の『木はいいなあ』（五八）の挿絵で親しまれている。（松居直）

西遊記 さいいうき

明代の長編小説。呉承恩の作といわれるがさだかではない。唐の太宗の世、玄奘三蔵が仏典を求めてインドへ旅立ち、一七年の歳月をかけ経典をもち帰った史実に基づき、多くの伝説が生まれ、宋代には語り物が流行し、『大唐三蔵取経詩話』が講談のテキストとして書かれた。元代には元曲『西遊記』が上演され、物語が成長し、明代中期に一〇〇回にまとめられた。石猿の孫悟空が猿王となり、仙人について修行し、変幻自在に天上界を荒らしまわりますが、釈迦の法力で抑えられる。のち三蔵法師に助けられ弟子となり、同じく弟子となった猪八戒、沙悟浄とともに三蔵を守って取経の旅に出て、道中出没する怪物や猛獣と戦い、八八難を排して、ついに天竺にたどりつき経典を

もち帰るといふ冒険物語である。本来主人公である三蔵は、いつのまにか三人の弟子に主役の座を譲り、作中、人間の弱さや愚かさを巧みに織り交ぜ、ユーモアたっぷりに三人三様の性格が描かれている。天上の神であろうと地上の魔王であろうと、いかなる権威にも屈しない痛快さが、本書が長く人々に愛されるゆえんであろう。また我が国でも江戸時代の『通俗西遊記』以降、繰り返し出版され、富山房『模範家庭文庫』中の中島孤島訳『西遊記』（一九二〇）をはじめ、児童向きの翻案本や再話本が数多く出されたが、近年は原典からの翻訳本や抄訳本も刊行され愛読されている。漫画本や漫画映画にされることも多い。（君島久子）

採話 さいわ

文芸用語。口承文芸に属する昔話・伝説・世間話などを収集して記録すること。原則として話者の語ったことばを一字一句厳密に記録することを要求される。戦前は筆記・速記などによって行われるのが普通だったが、戦後小型テープレコーダーが発達普及したために、初心者にも採話が可能になり、口承文芸の収集・記録を戦前の数倍の量に達せしめた。だが、語りを忠実に記録するということは単にテープを起こすという機械的な作業だけで可能になるものではなく、未解決の問題を多く抱えている。（吉沢和夫）

再話 さいわ 一般的には昔話、伝説、神話などを現代風に書きかえることを意味するが、戦後の民話運動

の中で民話の再話について提起された問題は、伝統の継承と創造という根本的な内容を含むものであった。^{*}民話とは本来民衆の集団創造による口承文芸であるが、それを一人の作家の文字文芸として創造する作業が再話で、その両者の質的な差異を前提として成り立つものである。したがって創作方法の問題として民話と対決することが重要で、民話を創作の素材とすることが問題なのではない。一九五〇年代に木下順二によつて提唱され松谷みよ子に継承された「祖先との協業」という命題は、民話の再話の基本的な方法の問題として現在も生きている。

(吉沢和夫)

サウスオール アイバン Ivan Southall 一九二一
ー オーストラリアの児童文学作家。戦時中、空軍のパイロットとして活躍。冒険小説シリーズを発表後、普通の子どもたちが危機に直面する姿を描いた『ヒルズ・エンド』(一九六二)、『燃えるアッシュ・ロード』(六五)、『To the Wild Sky 荒天を飛ぶ』(六七)で脚光を浴びた。その後、意識の流れる手法で、一人の少年の内面を描いた『風船をとばせ!』(六八)、『ぼくは逃げない』(七〇)、カーネギー賞受賞作『ジョッシュ』(七一)で、オーストラリア児童文学の代表的作家としての地位は不動のものになった。若き日の作者を思わせる『ジョッシュ』、『What about Tomorrow? 明日はどうなる』(七七)や、戦争体験から生まれた『The Long

Night Watch 長い夜間の見張り』(八三)のほか、『ゴールド・ラッシュ時代を扱った』『King of the Sticks 棒の王者』(七九)、『The Golden Goose 金のガチョウ』(八一)がある。講演集『A Journey of Discovery 発見への旅』(七五)が参考になる。

(牟田おりえ)

佐伯郁郎 さいき 一九〇一(明34) 詩人、評論家。本名慎一。岩手県生まれ。一九二五年早稲田大学仏文科卒業。二六年内務省に入る。戦時中は情報局に勤務し、児童文学、児童文化の統制を指導。日本少国民文化協会の設立などに力を尽くした。この間、「新児童文化」「少国民文化」などに評論、「週刊少国民」などに少年詩を発表。四三年には評論集『少国民文化をめぐる』を上梓する。詩集に『北の貌』(一九三二)、『極圈』(三五)などがある。

(上田信道)

佐伯千秋 さいき 一九二五(大14) 作家。本名薦田千賀子。広島市に生まれ、県立第一高女卒。原爆で両親を失い、日本女子大学を中退。保高德蔵編集の『文芸首都』同人。北杜夫、なだいなだ、田畑麦彦、佐藤愛子、日沼倫太郎らと交友があった。一九五五年「女学生の友」に連載の『赤い十字路』以来、少女を読者にするが、旧来の少女小説を脱皮した異性との物語、ジュニア小説で富島健夫と並び双壁といわれる活動をみせた。五九年『燃えよ黄の花』で第八回小学館文学賞受賞。代表作に『白い十字架』『青い太陽』ほか。コミッ

ク隆盛以後も他分野に向かわなかった。(北川幸比古)

早乙女勝元

さおとめ
かつもと

一九三二

(昭七)

小説家、

ノンフィクション作家、児童文学作家。東京の下町、足立区に生まれ、幼少時より貧困の中に育つ。一九四五年三月一〇日、一三歳の時に、一〇万人の生命が奪われた東京大空襲に出遭い、奇跡的に一命をとりとめる。戦後は町工場や出版社などを転々としながら、自らの生い立ちにもかかわる〈貧困〉と〈戦争の悲惨〉を主題に創作活動に打ち込む。五〇年、一八歳の時に貧困と戦争を告発した三〇〇枚の処女小説『下町の故郷』を出版、直木賞の候補となる。二六歳まで労働者として働きながら執筆を続け、五八年前後から文筆生活に入る。児童文学作品の代表作としては、東京大空襲を描いた『火の瞳』(一九六一)、『猫は生きている』(七三)、下町に住む子どもたちを描いた『ゆびきり』(六四)などがあり、さらには自らの体験を超えて戦争を告発した『ベトナムのダーちゃん』(七四)、『パパママバイバイ』(七八)などがある。七〇年、『東京空襲を記録する会』の結成に力を尽くし、全五巻に及ぶ『東京大空襲・戦災誌』によって同会は七四年の菊池寛賞を受けた。小説には『下町の故郷』のほかに自伝的大河小説『わが街角』(七三)、『秘密』(六九)、『下町の恋人たち』(六九)、『美しい橋』(七七)など多数。ノンフィクションとしては『東京大空襲』(七一)、『アウシュビッ

ツと私』(八〇)など。

(小西正保)

サガ

Saga

中世北欧の語り物、物語。一般に散文

で書かれた中世北欧の物語の総称、一二、三世紀のアイスランドで書かれたものが多く、約二〇〇編ほどが名をとどめているが、失われたものも少なくない。『アイスランドのサガ』とよばれるものにあつては個々の人物、あらゆる種類の農民、戦士、首領、王、また美女の生涯が、日々の生活の最も微細な点に至るまで真に迫って描き出されている。それらは題材もさまざまで、アイスランドの大学者スノリの書いた長さ三〇〇〇枚ほどになる『ヘイムスクリングラ』のような大作から、わずか三、四枚の『オードウンと白熊』のようなサトウルと呼ばれる短編まで長短さまざまだが、ほぼ四種類に分けてよい。一は、物語というよりも歴史的記述たることを期したもので、上記の『ヘイムスクリングラ』が神代からのノルウェー王朝史であるのをはじめ、『キリスト教のサガ』『アイスランド人の書』『植民の書』、北米の発見を扱った『赤毛のエリクのサガ』などがあり、おそらくこの種のものが最も早く着手されたらしい。二は、上記のサガが歴史的事実を客観的にたどるのに対して、その中の特定の人物を焦点に、その性格や像を具体的に描いてむしろ近代小説風の作で、四、五〇〇枚、一〇〇〇枚の興味深いものが多い。古代北欧の豪勇詩人エギルの生涯を、その詩を

まじえてたどった『エギルのサガ』、美女グドルンの数奇な生涯をたどって華麗沈痛な『ラックス谷のサガ』、キリスト教に帰依した賢者ニヤルの焼殺しを扱った『ニヤルのサガ』、豪勇グレートイルの波乱に満ちた生涯をたどった『グレートイルのサガ』を四大サガとするが、ことに最初の三作などは世界文学上に特記されている名作とされる。三は、若干の史実を核に想像力でふくらました伝奇小説的作で、ドイツの『ニーベルンゲンの歌』と同じ題材を扱った『ウォルスング家のサガ』、特殊の革袋を着て竜を退治したラグナー・ロドブロークの事跡と、その息子たちのイタリアやイギリスへの遠征を扱った『ラグナー・ロドブロークのサガ』など、これにもすこぶる興味深い作が多い。四は、さらにローマン的な空想的童話的作で『前代のサガ』『嘘のサガ』などと呼ばれるものが主だが、サガの魅力成す力強い客観性を失っている。多くは末期の作で長さも短いものが多く、ほとんど童話とすべきものもある。

(山室 静)

酒井朝彦

あさひこ

一八九四—一九六九(明27—昭44)

童話作家。本名源一。長野県飯田市の母の実家に生まれ、六歳の時父の死去に伴い同県木曾郡の名刹定勝寺に預けられる。小学校卒業後上京し、東京中学校を経て早稲田大学英文科に進む。在学中より島崎藤村に師事し文学を志す。卒業後出版社や女学校などに勤めつ

つ小川未明のネオ・ロマンティズムに傾倒して童話の創作に向かう。一九二四年未明の推薦で『東京朝日新聞』に『天に昇った蛭』を発表。同年個人雑誌『童話時代』を創刊。同誌は三号で休刊となったが『門と詩人の話』(のちに『ふるさとの門』と改題)などを発表して、ナイーブな詩的情趣が注目された。二八年千葉省三、伊藤貴麿らと同人誌『童話文学』を創刊。三十一年に休刊したが、三五年稲垣足穂らを加えて『児童文学』と改題して三七年まで続刊する。これらの同人誌に『ことと虫』『ゆきおんば』『雪の夜の子馬』『いたち』『雪虫』など代表作が発表された。いずれも木曾の自然と風物を背景とした象徴性豊かな短編である。四〇年童話作家協会童話賞を受ける。山国の子どもの生活と幻想を織り込んだ独自の世界は、敗戦後も一貫して変わらず、『母とかやのみ』『古びな』『雪むすめ』『うめの花と貝がら』などの諸作となって結実した。童話集として『春のラツパ』(一九三六)、『雪国の子供』(四一)、『読書村の春』(四二)、『芽ぐむ春』(四六)、『ゆきおんば』(四七)、『うめの花と貝がら』など多数。四六年には谷川徹三、川端康成らとともに戦後の文部省国語教科書編集委員を務める。また、『ハイジ』をはじめ英米児童文学の訳出や、少年期木曾の禅寺で養育されたことから宗教的関心が高くインド説話などの紹介にも当たった。創作民話『新・信濃むかし話』(六二)によって

未明文学賞を受ける。六一年には日本児童文学者協会会長を務めた。歿後代表作をまとめた童話集『雪の夜の子馬』(七八)が刊行された。

「ふるさと」の門ふるさと 一九二四年、個人雑誌「童話時代」二号に『門と詩人の話』として発表。都会に出て名をあげた詩人が幾年ぶりかで故郷に帰り、菩提寺を訪ねたおり古い門の白壁に小さな手の形を見出し、幼き日を回想してしばし感慨にふけるといふ短編。

壁の上のかえでのような手形にみずからの大きな手を当て「夢よりもなおふしぎな世界がここにある」と独白する詩人に作者の生い立ちが投影されている。命のふしぎさを抒情的にえがく朝彦童話の出発点となった作品。

【参考文献】「とうげの旗・酒井朝彦追悼号」(一九七〇 信州児童文学会)

堺 利彦 さかいとしひこ

(高橋忠治)

坂口 淳 さかぐちじゅん 一九〇八―七四(明41―昭49) 詩人。本名淳太郎。信濃松代町の生まれ。高等小学校卒業後、上京して写真館に勤め、西条八十の門下生となる。一九四一年応召、四六年復員。四九年上京してキングレコードの専属となる。のち、ビクターに移る。

『子鹿のバンビ』『ママのおひざ』など童謡のほか、歌謡曲、民謡も作詞。五六年詩誌「熊ん蜂」創刊、死亡まで私財を投じて発刊。童謡集『風と光と花と』(一九六二)、随筆集『石神井だより』がある。(尾上尚子)

阪田寛夫 さかたひろお 一九二五―(大14―) 小説家、詩人、放送作家。大阪市生まれ。東京大学国史科卒。

熱心なキリスト教徒の家庭で育った。母親は教会のオルガン奏者。音楽にかかわる者の多い一族の中にいて音楽への関心は深く、合唱団に参加したり音楽美学を学んだこともある。大学では三浦朱門と出会い、同人誌「新思潮」(第一五次)を刊行した。卒業後朝日放送に入社、二年間、庄野潤三のもとで働く。多才で、小説と並行して、童謡、合唱曲作詞、放送劇などを次々に発表。一九七五年、小説『土の器』で七二回芥川賞を受賞。『土の器』は、がんで亡くなった母親の姿を描いたもので、選者の一人だった永井龍男は「主人公への作者の愛情が、それを囲んだ一族の人物を描出するの

に過不足なく役立ち、一老女の終焉がやわらか味のある物語として伝わっている」と評した。児童文学関係では、七四年歌曲集『うたえバンバン』で、七六年詩集『サッチャン』で第四回、第六回日本童謡賞を受ける。また八〇年叙事詩『トラジイちゃんの冒険』で、第一八回野間児童文芸賞を、『夕方の匂い』で第一回赤い靴児童文化大賞を受けた。その世界は、関西の知的家庭の出身者にふさわしく人間への深い関心に根ざした大らかさと優しさを基調としている。ほかに詩集『わたしの動物園』(一九七七)、長編小説『漕げや海尊』(七九)、エッセイ『童謡でてこい』など多数の著書がある。

(三木 卓)

阪本 一郎 さかもと いちろう 一九〇四―八七(明37―昭62) 心理学者、読書研究家。代表的著書に『教育基本語彙』(一九五八)がある。一九五六年石山脩平らとともに「日本読書学会」を創設、二代目の会長となる。同会名誉会長。幼年語彙の研究のほか、読書研究に関する多くの著書研究論文がある。七六年第六回世界読書会議(International Reading Association)から功労賞を受けた。また各種の読書テストを試作、漫画や児童向け文章の表現研究などで学会に寄与するところが多い。

(倉沢栄吉)

阪本越郎 さかもと えつろう 一九〇六―六九(明39―昭44) 詩人。本姓坂本。福井県知事であった坂本鈺之助の次男

として福井に生まれる。父は蘋園と号し漢詩をよくし、永井荷風はいとこ、高見順は異母兄に当たる。東京の芝中学から山形高校を経て一九三〇年東大心理学科卒。山形高校時代亀井勝一郎、神保光太郎らと同人雑誌「そりおと権音」を出し、大学時代百田宗治の詩誌「椎の木」同人となり、三好達治、伊藤整、春山行夫などと交わる。「詩と詩論」の寄稿者となり、三一年処女詩集『雲の衣裳』上梓。文部省に勤務、視聴覚教育を指導した。「文芸レビュー」「詩法」「四季」などの同人となり、香気ある近代的リリズムの詩人として『貝殻の墓』(二三)、『暮春詩集』(三四)、『海泡集』(三六)、『果樹園』(四〇)、『海辺旅情』(四二)などの詩集のほか詩論集も多い。四〇年代ごろより児童文化に関心を抱くようになり、少年詩や児童文化評論を書き、アンデルセン童話の翻訳の仕事もある。五五年日本児童文芸家協会が創立されるや理事として尽力、公立学校共済組合の「文芸広場」の詩・童話の選者となり、生地福井講演の旅で病み帰京後歿す。当時お茶の水大学教授であった。七一年『定本阪本越郎全詩集』がある。

(福田清人)

坂本牙城 さかもと がじょう 一八九五―一九七三(明28―昭48) 漫画家。戦後は雅城と号した。東京都生まれ。東京府立第二中学校を卒業、中外商業新聞(現日本経済新聞)などに勤務し漫画を執筆した。その名を有名にしたのは

SF漫画のはしりというべき『タンクタンクロー』（一九三三・九―三六・一二）*『幼年倶楽部』である。三四年には宮尾しげをらと童心漫画集団を結成した。ほかに『ジャンケンボンチャン』（四〇）など。日中戦争中は、満蒙開拓団への慰問漫画運動に尽力、また、少年小説『大陸の勇者』（四九）も刊行している。戦後の仕事は水墨画が中心となった。画集に『坂本雅城作品集』（七三）がある。

（石子順）

坂本 遼 りょうもと 一九〇四―七〇（明37―昭45）詩人、児童詩運動家、児童文学作家。兵庫県加東郡東條町に生まれ、関西学院英文科を卒業。在学中に詩『おかん』が詩誌『日本詩人』に当選、草野心平らと詩誌『銅鑼』を創刊して詩作を続け、詩集『たんぽぽ』（一九二七）が農民詩の領域を押し広げるものと評価されて地位を確立。卒業後はゼネラル・モーターズ社を経て朝日新聞社に入社、ジャーナリストとして働く。戦後、同窓生でもある詩人、竹中郁と交友を深め、ともに児童詩運動誌『きりん』を創刊、子どもの自由な発想と生活感を尊重した児童自由詩を指導、その主張は『こどもの詩・綴方』（五三）に詳しい。多くの詩・少年少女詩を発表したほか、童話や少年少女小説の筆も執り、長編『きょうも生きて』（五九）、『虹 まっ白いハト』（六五）が代表作。歿後に『坂本遼作品集』（八一）、『かきおきびより―坂本遼児童文学集』（八二）が刊行さ

れた。

相良守峯

もりがら

一八九五―（明28―）独文学

（西嶋康雄）

者。鶴岡市に生まれ第四高等学校を経て東京大学独文学科卒業（二九・四）。水戸高等学校、第一高等学校、東京大学、慶応大学、京都外国語大学各教授を歴任する。文化功労者として顕彰（六八）され、文化勲章を受賞（八五）する。数々のドイツ文学研究や、ゲーテの『ファウスト』や、『ニーベルンゲンの歌』など多数の翻訳のほかに、児童のための『グリム童話傑作集』三卷（四六―四七）、『グリム童話選』三卷（五一―五二）、『ニーベルンゲンの宝』（四九）、シャルク『ニーベルンゲン物語』（五二）、ハウプトマン『沈鐘』（五四）などの翻訳や再話がある。

相良和子

わかしこ

（植田敏郎）

寒川道夫

みちがわ

一九〇九―七七（明42―昭52）生活

綴方運動家。新潟県新津に生まれ、長岡中学、高田師範卒。一九三〇年代、新潟県黒条小学校の訓導時代、生活綴方運動に参加。四一年十一月、治安維持法違反

の疑いで検挙され、教職を追われる。戦後、教え子の少年大関松三郎の詩集『山芋』（一九五二）を編集、作文教育、文学教育に尽力、明星学園の教師となり、のちに同学園小学校長となる。明星学園退職（七〇）後は、和光大学、国学院大学の非常勤講師、三鷹市教育委員などを務めた。主著に児童生活記録『タカの子』（六二）、『人間教師として生きる』（七八）がある。（中野 光）

桜井鷗村

おうえん

一八七二—一九一九（明五〇昭四）

翻訳家。本名彦一郎。愛媛県松山市生まれ。幼少時より読書を好み、キリスト教への関心をもつ。松山中学から明治学院に学ぶ。卒業後、入隊したが、病に倒れて帰郷。松山女学校や明治女学校の英語教師となる。このころから『女学雑誌』、『少年世界』などに、エッセイや小説などを発表。結婚して上京し、一八九九年には女子教育視察のため渡米。帰国して津田英学塾の設立に参加、やがて英語を教えるようになる。そのか

たわら一九〇一年創刊の『英字新報』（のちに『英文新誌』と改称）の編集主任となる。七年後には英文版『開国五十年史』の刊行の依頼を受け渡英。主な著作として『欧州見物』（一九〇九）、『英詩評釈』（一四）など。一二年に英学塾を辞してからは、もっぱら実業界に転身した。児童文学関係では、M・リードの海洋冒険小説『初航海』（二一）の翻案が好評。同時代の森田思軒とは異なり、言文一致調で、冗漫な部分を削除し、内容をわか

りやすくし、親しみやすい文体で訳し、逐語訳でなく意識を重視した点で注目される。この成功に刺激され、『世界冒険譚』全一二巻（一九〇〇—〇二）を企て、『遠征奇談』『絶島少年』などを翻案し、当時の少年たちの血を沸かせ、大衆的な海洋冒険小説に寄与した。

桜井庄太郎

さくらいしょうたろう

（原 昌）

桜田 佐

さくらだ たすく

一九〇一—六〇（明三四昭三十五）

仏文

学者。東京麻布に生まれ、一九二五年東京帝国大学仏文科卒業。東京高等学校教授を経て法政大学教授。ドードー『風車小屋だより』『月曜物語』の訳者として知られるほか、マロ『家なき子』、メーテルリンク『青い鳥』など児童向けの翻訳多数。創作では二年『兎吉君とそのお母様との対話』を、『読売新聞』に連載。著書に三部作『こどもの朝』『こどもの旅』『こどもの道』（一九五七—五九）など。（佐藤宗子）

小砂丘忠義

ただよし

一八九七—一九三七(明30—昭12)

生活綴方運動家。本姓笹岡。一九三〇年代の生活綴方運動の全国的交流舞台であった教師向け雑誌第二次「綴方生活」、子ども向け雑誌「綴方読本」の主宰者。両誌に全国から寄せられた子どもの綴方(作文)、詩、生活記録などから彼がつくり出した児童像と文章表現指導の体系は、第二次大戦後の生活綴方の復興期に各方面から再評価を受け、広く知られるようになった。遺稿集『私の綴方生活』(一九三八、のち五一年に『生活綴方の伝統』として復刊)。

佐々木赫子

ささき

一九三九—(昭14—) 童話作家

神戸市に生まれ、岡山大学教育学部を卒業。結婚後の一九七〇年ごろから児童文学に興味をもちはじめ、同人誌「子どもの町」に処女作『あしたは雨』(一九七二)を発表し、日本童話会賞を受賞。さらに『旅しはいの二日間』(七三)で日本児童文学者協会新人賞を得た。また、この加筆作『旅しはいのくるころ』(七三)では、岡山県の農村を舞台に強い生命力にあふれた子どもたちの群像を描き、児童福祉文化奨励賞をも受賞した。『同級生たち』(八三)で日本児童文学者協会賞。

佐々木喜善

ささき

一八八六—一九三三(明19—昭8)

(森井弘子)

民俗学者。筆名鏡石。岩手県遠野市に生まれる。早稲田大学高師部国漢科聴講生となるが中退。在学中、

*柳田国男に語った郷里の伝承が柳田により『遠野物語』

(二九一〇)としてまとめられた。小説家を志望したが成らず、帰郷して村農会長、村長などを務める。のち、民俗学研究に打ち込む。著書に『聴耳草紙』(一九)、奥州のザシキワラシの話(二〇)、江刺郡昔話(二二)、紫波郡昔話、『東奥異聞』(二六)、老嫗夜譚(二七)、農民俚譚(三四)などがあり、民話採集・研究者としての業績が大きい。

(北 彰介)

佐々木邦

ささき

一八八三—一九六四(明16—昭39) 英語・英文学者、教育者、翻訳家、作家。静岡県駿東郡清水村(現沼津市)生まれ。父はヨーロッパ帰りの建築家。諸校を転々し明治学院高等部卒。教職においても転々したが、最終は明治学院大学教授。作家としては『悪戯小僧日記』(一九〇七)が出世作で、『愚弟賢兄』(二八)、『ガラマサどん』(三〇)、『地に爪跡を残すもの』(三一—三三)、『心の歴史』(四九、六二年には米国で出版)、『赤ちゃん』(五七、五八)などを代表作とする。戦後に再評価を受けて『漱石と並んで外国文化の笑いを移入した先覚者』(外山滋比古)、今日の中流家庭の風景を先取りした作家などと位置づけられる。日本・日本人の望ましい姿を時代の枠組みの中で追求したモラリスト・文明批評家の側面も見逃すことはできない。この時のアングロ・サクソン風な折衷と中庸の精神がユーモアの源泉となったのである。その分、日本の歴

史的風土では孤独な作家だった。児童文学にその特質は端的に示される。一九一三年ごろからこの方面の活躍が目立ち、『珍太郎日記』『続珍太郎日記』(二〇、二一)以下、『少年倶楽部』『少女倶楽部』に連載した『苦心の学友』(二七、二九)、『全権先生』(三〇)、『村の少年団』(三〇、三二)、『少女百面相』(三二)、『トム君・サム君』(三三)などが代表作にあがる。ここでは『トム君・サム君』についての岡保生の評「満州事変後の軍国的世相のなかで、このような日米少年間の友情を明るくえがいたところに、邦の資質が見られた」を掲げておこう。

『苦心の学友』^{がくしんの}^{くしんゆう} 長編小説。初出一九二七年一月、一九二九年二月『少年倶楽部』。三〇年三月、大日本雄弁会講談社刊、河目悌二装画。花岡伯爵家の三男照彦様の御学友として住み込んだ、中一の内藤正三君の苦心の物語。大名家の遺風を伝える貴族の家庭と中流家庭とを二少年に代表させ、老若男女、価値観ともに多様な登場人物を絡ませつつ、向目的に描く。新旧・上下の対立には常に和解と妥協が用意され、ここにユーモアは醸される。佐々木邦の面目の示された傑作と諸家の推すところである。なお河目悌二の挿絵は作風とよく響き合い、連載中から評判の高かったもの。

【参考文献】外山滋比古『佐々木邦解説』(一九七七『日本児童文学大系』¹⁹ ほうぶ出版)

(宮崎芳彦)

佐々木すぐる ^{ささき}^{すぐる} 一八九二—一九六六(明25—昭41)作曲家。本名は英。兵庫県に出生。一九一六年、東京音楽学校甲種師範科を卒業。浜松師範に六年間勤務のち出京、主として童謡の作曲に専念。著名な作曲作品に『月の沙漠』(加藤まさを詩)、『お山の杉の子』(吉田テツ子詩)、『赤ちゃんのお耳』(都築益世詩)などがあり、短音階の日本的な抒情をたたえたものが多い。

佐々木たづ ^{ささき}^{たづ} 一九三二—(昭7—) 童話作家、随筆家。本名田鶴。東京に生まれ、一九五〇年、

東京都立駒場高校三年在学中、緑内障のため失明。翌年やむなく同校を中退。その後、童話を書きはじめ野村胡堂に師事した。童話集『白い帽子の丘』(一九五八)は『少年と子だぬき』などみずみずしい感性の光る七編の短編が所収されている処女作品集。第一回児童福祉文化賞を得た。六二年、英国盲導犬協会・リーミントン訓練所で訓練を受けたのち、『ロバータさあ歩きましよう』(六四)を執筆、日本エッセイストクラブ賞を受賞。二年後の六六年九月から一〇カ月間、米国パーキンス盲学校へロバータとともに留学。盲導犬ロバータが書いた日記形式の留学記『わたし日記を書いたの』(六九)では、野間児童文学芸賞推賞を受けた。作者自身は、子どもの心に呼びかけ、話しかけることをモットーにし、読んでいて楽しくなる童話をと願って書き続け

ている。

佐佐木信綱

ささき のぶつな

一八七二―一九六三(明5―昭38)

(森井弘子)

歌人、歌学者。父弘綱の早教育を受ける。東京帝国大学古典科卒業。「心の花」(一八九八年創刊)に拠って和歌革新運動を推進。一九〇八年、東京帝大講師、『万葉集』を中心に国文学の文献学的研究を進め、三七年第一回文化勲章受賞。二〇世紀初頭、唱歌運動に参加。文部省の『尋常小学唱歌』全六冊(一九一―一四)の編集委員を務める。『勇敢なる水兵』『夏は来ぬ』『水師營の会見』などを作詞。唱歌作品集に『絵入幼年唱歌』(一八九三)、『少年歌話(もかり舟)』(九七)、『軍歌選抄』(一九三九)などがある。自伝に『ある老歌人の思ひ出』(五三)。

(山住正己)

佐々木林風

ささき りんぷう

挿絵

さしえ

定村青萍

さだむら せいひら

一八九一―歿年不詳(明24―?)

童謡詩人。本名国夫。奈良市に生まれ、国学院大学を卒業。浅草の千束小学校、富士小学校などで教鞭を執りながら、童謡の創作と児童詩の指導に携わり童謡集『夢の都』『青萍童謡集』を出し、また一九二四年『教

育上より見たる童謡の新研究』を著して注目された。

その童謡観には野口雨情の影響が強い。浅草童謡研究会、児童芸術協会などの中心的存在として童謡の研究や振興に努め、「童謡家庭会」の組織化にも尽力した。

(畑中圭一)

サーツ ナターリヤ・И Наталья Ильинична Сау

一九〇三ー ソビエト児童演劇の草分けの一人、演出家、劇作家、俳優。世界初演の『青い鳥』(一九〇八)の作曲者の娘で、一九一七年スクリヤービン音楽学校を卒業し、革命直後の一八年若くしてモスクワ市児童音楽部門の責任者になり、中央児童劇場支配人などの要職を歴任し、六五年、児童のための音楽劇場として世界最初のモスクワ児童音楽劇場を創設、その支配人、主任演出家、指揮者を兼ね、自らも出演し、児童劇やオペラ台本を書く。プロコフィエフ『ピーターと狼』(三三)は彼女のために作曲された。

(中本信幸)

サツカレー ウィリアム William M. Thackeray

一八一七ー六三 イギリスのウィクトリア朝の代表的な小説家の一人で、代表作『虚栄の市』は世界的に有名である。児童文学に『バラと指輪』(二八五五)があり、魔力をもつバラと指輪の働きを交えて、二つの国の王位継承に絡む争いや、恋のさやあてを描き、妖精物語のパロディとして滑稽味あふれる喜劇となっている。やがて来る『アリス』の先駆となったファンタジーで

ある。

(谷本誠剛)

ザッパー アグネス Agnes Sapper 一八五二ー一九

二九 ドイツの女流児童文学作家。逆境にも明るさを失わずけなげに生きていく市民の家庭を庶民的な筆致で描き、一連の典型的な家庭小説を残した。代表作『愛の一家』(一九〇七)は、今世紀で最も成功を収めた児童文学作品の一つに数えられる。ほかにその続編『Werden und Wachsen. Erlebnisse der großen Pfafflingskinder 大きくなったプフェリングの子供たち』(一〇)、また『一年生時代』(一八九四)などの作がある。

(関 楠生)

薩摩 忠 さつまつ 一九三一ー (昭六ー) 詩人。日

仏交流に尽くした文化人、薩摩治郎八の子として東京に生まれ、慶応大学フランス文学科を卒業。一九六四年、詩集『海の誘惑』で第四回室生犀星詩人賞を受賞。訳詩集『エリュアール詩集』(一九八三)、『薩摩忠詩集』(八五)があり、少年少女向きの詩集に『まっ赤な秋』(八六)がある。近代日本の童謡や唱歌の名作を論評したエッセイ集『うたの博物誌』(八五)もあり、日本文芸家協会、日本現代詩人会会員。日本詩人クラブ、日本童謡協会理事。

(こさせ たまみ)

佐藤 一英 さとう いちえい 一八九九ー一九七九(明三二ー昭五)

詩人。愛知県一宮市に生まれ、早稲田大学英文科予科中退。名古屋で春山行夫らと詩誌「青騎士」を創刊。

のち「詩と詩論」のメンバーとなる。第一詩集『晴天』（一九二二）には、ポーや三富朽葉の影響がみられる。詩壇主流からは常に孤立していたが、生涯、詩の根源を探り、実験作ともいえる作品を書き継いだ。代表詩集に『空海頌』（四二）がある。児童文学とのかかわりで佐藤一英の名が落とせないのは、一九三一年（昭六）に前衛的児童文学雑誌「児童文学」を刊行、その主宰者として『純粹童話』（『詩的童話』の主張をしたことによる。この雑誌は宮沢賢治の『北斗守軍と三人兄弟の医者』『グスコープドリの伝記』の発表誌としても知られるが、寄稿者の多くは三〇歳前後の若い詩人であった。佐藤は「赤い鳥」に代表される文壇作家の童話に満足できず、より純粹な童話をめざし、詩人の手になる児童文学の誕生に期待したのである。その試みは、今日再評価されてよいものがある。（関口安義）

佐藤紅緑

（こうろく）

一八七四—一九四九（明治七—昭二四）

小説家、俳人、戯曲作家。本名治六。青森県弘前で津軽藩の漢学者の子として生まれ、弘前中学中退後、上京して苦学し、郷里の先輩陸羯南の主宰する日本新聞の記者となった。正岡子規門下の俳人として早くから名があったが、一九〇六年に短編『あん火』を書いて自然主義作家としてデビューし、同じ年に書いた新派の脚本『俠艶録』が好評であったところからやがて通俗作家に転じ、柳川春葉、菊池幽芳らとともに多くの

家庭小説を書いた。代表作に『大盗伝』『富士に題す』『麗人』（一九二九）などがあり、社会問題をテーマに義侠と人情の世界を描くことに巧みであった。二七年、当時講談社の「少年倶楽部」編集長加藤謙一の依頼で同誌に最初の少年小説『あ、玉杯に花うけて』を連載、読者の熱狂的な支持を得、以後『紅顔美談』（二八）、『少年讃歌』（二九）、『一直線』（三〇）、『満潮』（三九）などを次々に連載、それらは単行本としても広く読まれ、大仏次郎、吉川英治、佐々木邦、山中峯太郎、江戸川乱歩らとともに大衆的児童文学の代表的作家となった。一方、講談社発行の「少女倶楽部」に連載した少女小説も好評を博した。代表作に『毬の行方』（二八）、『夾竹桃の花咲けば』（三〇）などがある。紅緑の約二〇編の少年少女小説の原型は、第一作『あ、玉杯に花うけて』にほぼ集約できる。登場人物や背景は異なっても、主人公が逆境と闘い、学問の成就や理想的な家庭の建設をめざしたゆめない努力を続け、めでたい結末を迎えるというストーリーは全作品に共通し、その背後には忠孝を軸とした半封建的なモラルが貫かれている。ひと言でいえば、紅緑の少年小説の最大の特徴は、「立身出世主義」ないし「艱難汝を玉にする主義」、少女小説は「良妻賢母主義」にあるといえよう。通俗小説の域を出ない紅緑の家庭小説との共通点も少なくない。それにもかかわらず、紅緑の少年少女小説が多

くの読者を獲得したのは、当時の芸術的児童文学のほとんどが、ストーリー性の乏しい、子どもの内的世界を描いたものであったのに対し、紅緑は子どもを社会的存在として捉え、葛藤を中心にダイナミックにストーリーを展開させたからである。ことに「熱血小説」と呼ばれた少年小説には、随所で人生に関する作者の熱いメッセージが語られ、読者の広い共感を呼んだ。社会論、人生論を踏まえた成長小説の側面をもちながらも、全体としては体制順応の文学であつたために紅緑は長らく研究者たちから黙殺され、児童文学史に位置づけられることもなかったが、佐藤忠男が『少年の理想主義について―少年倶楽部』の再評価（五九・三「思想の科学」）で問題提起を行ったのを契機に、再検討、再評価が行われるようになった。なお、詩人サトウハチローは長男、作家佐藤愛子は末娘である。

「あ、玉杯に花うけて」^{あきよくは い} 少年小説。一九二七年五月―二八年四月、『少年倶楽部』連載。貧しい中にも勉強の志を忘れない少年青木千三を中心に、友情と正義感が織り成す物語。階級の問題、政党政治、少年野球、入試など、当時の少年たちの社会的関心事が描かれているのも特徴。主人公は苦学してみごと旧制一高に合格するが、題名はその一高の寮歌からつけられたもの。

【参考文献】加藤謙一編『少年倶楽部名作・佐藤紅緑全集』上・

下（一九六七 講談社）、佐藤愛子『花はくれない―小説佐藤紅緑』（一九六七 講談社）

佐藤さとる ^{さとる}

一九二八（昭三） 児童文学作家。本名、暁。神奈川県横浜須賀市に生まれ、一九四九年関東学院工業専門学校建築科卒業。在学中より童話創作をはじめ、平塚武二に師事、また五〇年に神戸淳吉、長崎源之助、いぬいとみくらと同人誌「豆の木」を発刊。五九年、『だれも知らない小さな国』をはじめて自費出版、同年講談社より刊行し、毎日出版文化賞、日本児童文学者協会新人賞を受賞。以後、中・短編を中心に現代ファンタジーの作家として活躍。「コロボックル」シリーズには『豆つぶほどの小さないぬ』（一九六二）、『星からおちた小さな人』（六五）、『ふしぎな目をした男の子』（七一）、『小さな国のつづきの話』（八三）の続編のほか、短編作品もある。短編が長編に発展した作品もいくつかみられ、姉妹作に『てのひら島はどこにある』（六五）もある。児童福祉文化賞、野間児童文芸賞受賞の『おばあさんのひこうき』（六六）、横須賀の少年時代に基づいた『わんぱく天国』（七七）のほか、『海へいった赤んぼ大将』（六八）、『おおきなきがほしい』（七二）など幼年童話や絵本も執筆、画家村上勉とのコンビで知られる。「法則の設定」「法則の運用」を重視するファンタジー創作観をもち、内面で空想をはぐくみ、それを細かく描写する作風で、空想がいわばミニ

チュアの小さい世界である作品も多い。また「成長」により失われる世界ではなく、心の中に保持される点が特徴で、魅力であると同時に、世界の弱さ、パターン化も指摘される。大人の読者も多く、大人向けショートショートなども執筆している。

「だれも知らない小さな国」（だれもしらない、ちいさなくに） 長編ファンタジー。一九五九年に自費出版後、講談社刊。小学生のころ大切にしていた三角平地で、青年の「ぼく」が小人のコロボックルたちと出会い、交流を深めると同時に協力者おちび先生とも出会い、開発計画からこの「矢じるし」の先づき「の国を守っていく。自分だけの世界の大切さと「出会い」の感動が印象的で、同年刊のいぬいとみこ『木かげの家の小人たち』とともに現代ファンタジーおよび現代児童文学出発の作とされる。

佐藤忠男

ただお

一九三〇

（昭五）

評論家。

新潟生まれ。新潟市立工業高校卒。「映画評論」「思想の科学」などの雑誌の編集に携わり、映画評論を中心に教育、漫画評論の分野でも活躍。「少年の理想主義について」「少年倶楽部」の再評価（一九五九・三）「思想の科学」は、戦後児童文学が無視し続けてきた大衆的児童文学の再評価を問題提起。これを収めた『少年の理想主義』『権利としての教育』のほか『日本の漫画』など著書多数。

（野上 曉）

佐藤忠良

さとう ちゅうりょう

一九二二

（明四五）

彫刻

家。宮城県生まれ。六歳から二〇歳まで北海道で過ごす。一九三九年東京美術学校彫刻科卒業。代表作に「群馬の人」「帽子・夏」など。子どもをテーマにした作品が多いことでも知られる。八一年にはフランス・アカデミー・デ・ボザールの客員会員に推挙され、国際的に高い評価を得ている。一方、児童出版美術の仕事も少なくなく、絵本の代表作に『おきなかぶ』（一九六二）などがある。

（松本 猛）

サトウハチロー

一九〇三

（明三六）

童謡詩人、児童文学作家、随筆家。本名は佐藤八郎。陸奥速男、清水七郎、山野三郎など多くの別名も用いた。小説家・佐藤紅緑の長男として東京に生まれる。女流小説家の佐藤愛子は異母妹。思春期にありがちな父への反発から中学校を転々とし、最終的に立教中学を中途退学。父より監督方を依頼された富士幸次郎の影響で詩を書きはじめ、また西条八十に師事し、「少年倶楽部」「少女倶楽部」などに童謡や抒情詩を発表、処女詩集『爪色の雨』（一九二六）のほか少年詩集『僕等の詩集』（三五）を出版。一九三〇年ごろより少年少女向けのユーモア小説も書くようになり、『ユーモア艦隊』（三四）、『おさらび横町』（三五）など多数の作品を出版、推理小説風な運びの中に友情をたたえたものが多い。また歌謡曲の作詩にも活躍し、『麗人の歌』『もずが枯木

で、『目ン無い千鳥』などはラジオやレコードを通して広まり、太平洋戦争中には軍歌もつくった。第二次大戦後は、敗戦の翌年につくった歌謡曲『リンゴの唄』が大衆から圧倒的に支持されたのに加えて、NHKのラジオ番組『話の泉』のレギュラー出演、『東京タイムズ』紙に長期連載の随筆『見たたり聞いたりためしたり』などの人気でいわゆるマスコミ文化人となり、その力を駆って念願の童謡運動を展開。NHKのラジオ番組『うたのおばさん』をはじめ諸種の雑誌やレコードに精力的に作品を発表、童謡集『叱られ坊主』(五三)、『木のほり小僧』(五四)などを刊行、前者で芸術選奨文部大臣賞を受賞。また野上彰や藤田圭雄とともに童謡と詩の月刊誌『木曜手帖』(五七)を創刊、研究会を開いて後進を育て、指導書『童謡の作り方』(五四)、『ボクの童謡手帖』(五三)なども著した。少年少女小説においても、NHKでラジオドラマとして放送した作品を散文化したユーモア小説『ジロリンタン物語』(五二)そのほかを出版している。六九年に日本童謡協会が創設されるとその初代会長に就任。NHK放送文化賞受賞(六三)、紫綬褒賞受賞(六六)、勲三等瑞宝章受賞(七三)。

七三年一月一日、心臓発作により永眠。

「叱られぼうず」^{しかられ}_{ばうず} 童謡集。一九五三年刊。一七歳で書いたとされる『トランプ』以来の作品よりの自選集。一九五編の詩・童謡一冊と、作曲された作品六

八編を収めた曲譜集とから成る。『かわいいかくれんぼ』『ともだち』など子どもたちに親しまれた代表的な作品が多い。

【参考文献】宮中雲子『うたうヒボボタマス』(一九八三 主婦の友社) (宮中雲子)

佐藤春夫^{はるお} 一八九二—一九六四(明25・昭39) 詩人、小説家、童話作家。和歌山県新宮市生まれ。新宮

中学時代から「明星」「スバル」に短歌を投稿。卒業後は、慶応大学予科に入学する。堀口大学と同窓であった。在学中は詩歌を多く創作し、「スバル」の主要な執筆者であった。同郷の大石誠之介の大逆事件での刑死に触発された傾向詩『愚者の死』(一九二一・四)、抒情詩『ためいき』(二三・六)も「スバル」発表であった。慶応退学後、現在の横浜市港北区に当たる中里村に居を移し、文筆に専念する姿勢となった。『西班牙犬の家』(二六・一一「星座」)、『病める薔薇』(二七・六「黒潮」)の発表があり、流行作家への地歩を築くこととなる。『田園の憂鬱』(二八・九「中外」)、『お絹とその兄弟』(二八・一一「中央公論」)の秀作もこの時期であった。児童文学の創作も同時期であり、『蝗の大旅行』(二一九「童話」)、『実さんの胡弓』(二三・七「赤い鳥」)などの代表作の執筆があった。独自の浪漫的作風による小説家として、そして西洋風な小説の流行を批判する伝統的美意識に立つユニークな評論家として、近代文学史

に光彩を放った文学者であった。児童文学の著述としては、『蝗の大旅行』(二六)、『正夫君の見たゆめ』(四三)などの童話集、『マルコポーロと少年達』(四一)などがある。

【参考文献】岡田純也・福田清人『佐藤春夫人と作品』(一九六六 清水書院)

佐藤通雅

みちまさ

一九四三

(昭18)

評論家

作家、歌人。岩手県前沢町に生まれる。東北大学卒業後、高校に勤務する。一九六六年、個人編集誌『路上』を創刊、文学活動の拠点とする。新美南吉を「自己放棄者」と位置づけた『新美南吉童話論』(一九七〇)、『白秋の童謡』(七九)、『宮沢賢治の文学世界』(七九)、児童文学とは何かという問題を歴史的な文脈の中で考えた『日本児童文学の成立・序説』(八五)などがある。創作に、『白鳥』(七二)、『もえるゆき』(七一)ほかがある。

(宮川健郎)

サドヴァヌ

ミハイル

Mihail Sadoveanu 一八八〇

一八九六 ルーマニアの小説家。二〇世紀前半の最大の散文作家とみなされている。ルーマニアの東部モルドヴァ地方の出身。祖国の過去の時代に題材を取った多くの歴史小説とともに、農村に生きる同時代の地主、農民、きこり、漁師などの姿を深い心理的洞察をもって描いた多くの短編がある。児童文学として書かれたものではないが、子どもの姿を描いた短編には青

少年の愛読書となっているものが多い。『Domnul Trandafir トランダフィル先生』『Școala școlii プラジルへの移民』『Puica プイカ』などが有名である。児童文学として書かれたものでは、継母のもとから逃げて祖父母の家にいくため森の中を通り、さまざまな冒険に出会い、幻想の世界に入り込む六歳の少女を主人公にした『Dumbrava minunată 魔法の森』(一九五〇)、一九世紀末の労働運動を背景にドナウ川下流の自然の中で生きる少年の姿を描いた『Nada Florilor 花の浮島』(五〇)などが代表作である。

佐藤義美

よしみ

一九〇五

一六八

(明38)

昭43 詩人

児童文学作家。大分県竹田市に生まれ、早稲田大学国文科卒業。大学在学中から「赤い鳥」「ゴドモノクニ」などに童謡を投稿、早くから童謡作家として遇される。府立三商の国語の教師をしながら、童謡と詩を書きつづり、童謡集『雀の木』(一九三三)、詩集『存在』(三四)に結実させる。一九三七年奈街三郎、巽聖歌、與田準一らと幼年文芸サークルを結成。四一年教師を辞め、日本出版文化協会児童出版課に勤務する。そのころから童謡を書き出す。『プークマ ウークマ』(四二)、『ライオン』『タイハウ』(四二)などの幼年童話が生まれた。児童文学者としての佐藤義美は、戦後一段と飛躍する。四七年柴野民三、奈街三郎らと創刊した「こどもペン」は、義美の新しい童謡と童話創作の実験道場

の感がある。『あるきなきさいよ 雪だるま』(四九)のような斬新な発想に成る童謡が発表された。「こどもペン」廃刊後は、『キンダーブック』や『チャイルドブック』に作品を発表、同時に『ABCこどものうた』(朝日放送)や『NHKうたのえほん』(NHK総合テレビ)などラジオ・テレビ放送のための童謡を多くつくっていった。『アイスクリームのうた』『ことりやの』

とりさん(以上服部公一)^{*}。『いぬのおまわりさん』『パスのうた』(以上大中恩曲)、『うまさん』(萩原英彦曲)、『てたき』(溝上日出夫曲)など、優れた作曲家による曲がつき、全国津々浦々で歌われた。一方、童謡は無駄のないリズムミカルな表現に特徴をみせる『ぶらんこのり』『くじらつり』『シロクマ さよなら』などのほか、『ミルクのみずうみ』のような社会風刺作品、『ネコばば』『紙ねん土』のような幻想的な作品、さらに『他人の痛さ』をはじめとする原爆を扱った一連の作品も書いている。産経児童出版文化賞を受賞した『あるいた雪だるま』(五三)ほか戦後刊行された童話集も数多い。六八年一月一日歿。歿後『佐藤義美全集』六卷(七四)が刊行された。

「いぬのおまわりさん」 童謡。初出一九六〇年一月、『チャイルドブック』。情緒抜きの直截簡明な表現、技法的には「にやんにやん」「わんわん」など擬音語の大胆な採用と、繰り返しのリズムを重視し、経済

の高度成長下に育つ幼児の感性に訴えた。大正期の北原白秋の『雨』『この道』、西条八十の『かなりや』『かくれんぼ』と比べると、違いは歴然たるものがある。近代音楽を深く理解する大中恩によって歌詞にふさわしいリズムミカルな曲がつき、日本の幼児の愛唱歌となっている。(関口安義)

佐藤米次郎

さとう べいじろう

一九一五

(大4)

版画家

青森市に生まれる。青森中学卒業(一九三三)後久留島武彦の講演から口演童謡に関心を寄せ、東奥日報社社員の際の童話会を発足させた。絵、版画をよくし、『日本の子供』に挿絵を、「童話研究」の表紙に版画を発表し日本版画協会会員に推挙された。朝鮮に移住(四〇)後も版画による子どもの生活を表現し一家を成した。戦後一九四五年引き揚げ、地方誌『青い森』『むつの子』(四六)を創刊、また童話集の挿絵に版画表現をして好評を得ている。青森県文化賞(八〇)、第一回地域文化功労者文部大臣賞(八三)を受賞した。(滑川道夫)

サトウオク

Sat-Okk

一九二五

インディアン出身のポーランドの異色作家。本名スタニスワフ・スプ

ワトウィチ。ショーン族の酋長とシベリア流刑地から逃亡したポーランド女性との間に生まれた。代表作『Ziemia słonych skal 塩からい岩の土地』(一九五七)は主人公がさまざまな試練を経て、白人たちと堂々対決できる一人前のインディアンに成長するまでを描い

た自伝冒険物語。また母の革命家時代をテーマにした『*Дополу cюдима* 道はるゑな』(七三) 共作)などがある。(内田莉沙子)

サトクリフ ローズトリ Rosemary Sutcliff 一九

二〇、イギリスの児童文学作家、小説家。イギリス海軍軍人の娘として生まれ、二歳の時の病気がもとで以後歩行困難になり、短期間を除いてほとんどの教育を家庭で受けた。精神と肉体に傷を負って葛藤を経験する主人公が作品に多く登場するのはそのためである。

一四歳で美術学校に入り細密画の専門家となるが、一九五〇年代初頭から作家に転じた。『第九軍団のワシ』

(一九五四)、『*The Silver Branch* 銀の枝』(五七)、『と

もしびをかかえて』(五九)のローマン・ブリテン三部作

で歴史の変動期にあつて数奇な運命を生きる若者たちの姿を生き生きと描き出し、歴史小説作家としての位置を確立した。『ともしびをかかえて』で五九年カーネ

ギー賞を受賞。『太陽の戦士』(五八)、『運命の騎士』(六〇)を経て『王の印』(六五)に至るまでの間に書いた長

編によって綿密なプロット、厳密な細部、息詰まる物語の中に優れた人間造型をみせる作家として円熟し、

第二次大戦後のイギリス児童文学の主要作家に数えられるようになった。七〇年代にはラジオの脚本、幼年

向き歴史物語など新しい領域に転じた。幼いころから

興味をもっていたイギリスの伝説の再話はすでに六〇

年代からはじまっていたが、八〇年代に入ると『*The Light Beyond the Forest* 森の向いの光』(八〇)のようにアーサー王伝説を素材とした長編を書きはじめた。『思ひ出の青い丘』(八二)は作家になるまでの過程を書いた自叙伝である。(猪熊葉子)

真田亀久代

きくよ

一九一〇

(明43)

童謡詩人。山口県に生まれる。朝鮮京城師範卒業。慶北尚州

小学校に勤め、終戦後引き揚げる。その間、後期「赤

い鳥」*「ゴドモノクニ」の童謡欄(北原白秋選)に投稿、

童謡同人誌「チチノキ」「昆虫列車」に同人として参加

する。戦後は少年詩も書く。著書に、私家版童謡詩集

『えのころぐみ』(一九七三)がある。その作品は、繊細

な感性の後ろに確かな目を感じられ、女性にありがちな

甘さはない。(清水たみ子)

さねとう あきら 一九三五 (昭10) 児童文学作家、児童劇作家。本名実藤述。中国文学者実藤恵

秀の三男として、東京に生まれる。一九四四年から四

六年にかけて広島市外に疎開し、原爆を山越しに見た。

五四年、早稲田大学文学部演劇科に入學したが、演劇

活動に熱中して中退。五八年、劇団「仲間」に入団し、

文芸演出部に所属して戯曲を書きはじめる。六一年に

メキシコ革命下の民衆と子どもを主人公にした児童劇

『ふりむくペドロ』が上演され、話題となった。児童

劇のジャンルで十分には表現の機会がなかったモ

チーフをもとに、七〇年ごろから児童文学に力を入れるようになり、最初の本『地べたつこさま』（一九七二）で日本児童文学者協会新人賞や野間児童文芸賞推奨作品賞を受賞した。最下層の民衆を主人公にした八編の短編からなるこの作品は、民衆のエネルギーと合わせて、その孤独、エゴイズム、怨念などをえぐり出し、そこから民衆の真の連帯を打ち立てようとするものだった。山谷の子どもたちを描いた『なまけんぼの神様』（七四）や、学童疎開の少女と脱走兵の悲劇『神がくしの八月』（七五）も、この系列の作品である。このほか、小学館文学賞を受賞した『ジャンボコッコの伝記』（七九）など、子どものエネルギーに焦点を当てた作品も多い。児童劇集『ふりむくなペドロ』（七六）、評論集『逆風に向けて羽ばたく』（八六）や絵本なども含め、多数の著作がある。

佐野美津男

（長谷川 潮）
 一九三三（昭八）〜八七（昭八）
 作家、評論家。本名高俊。東京浅草生まれ。太平洋戦争

末期、学童疎開中に東京大空襲で家族を失い、戦災孤児として終戦後の少年期を放浪生活で送る。都立蔵前工高二年修了後、大学中退。一〇代の終わりごろから詩を書きはじめ、一九五四年に北村順治らと少年詩誌「しぐなる」を創刊。五八年から児童文学を中心とする文筆生活に入る。六〇年安保闘争後、政治的立場の違いから日本児童文学者協会を退会。六八年、山中恒、

鈴木悦夫らと児童文学者集団「六月新社」を結成し、月刊「児童図書館」編集委員となる。現代子どもセンタイ理事としても活躍。七〇年から相模女子大学に勤務、のち教授となる。創作、詩、ルポ、評論、研究など、その活動は多方面にわたったが、ことに評論では早くから作家の主体性の確立を主張、また子どものエネルギーに注目し、児童文学の目的を子どもの自立に置いた。『現代にとって児童文化とは何か』（一九六五）、『児童文学セミナー』（七九）、『子ども学』（八〇）などはその主張を結実させたものといえる。創作では、作中の子どもの行動に作者自身が積極的に荷担する『にいちやん根性』（六八）、前衛的な手法を使った『ピカピカのぎろちよん』（六八）、体験に基づいた記録小説『浮浪児の栄誉』（六二）などが代表作。

佐野洋子

（砂田 弘）
 一九三八（昭一三）〜
 絵本作家。

北京で生まれる。武蔵野美術大学デザイン科卒業。一九六七年から一年間、ベルリン造型大学でリトグラフを学ぶ。主な自作作品に『おじさんのかさ』（一九七四）、『わたしのぼうし』（七七）、『わたしが妹だったとき』（八二）などがあり、サンケイ児童出版文化賞、講談社出版文化賞、新美南吉文学賞を受賞。一方、リアルな鋭い感性の奥に人生の悲哀を直截なことで表すエッセイ『私の猫たち許してほしい』（八二）なども書き、最近

サーバー ジェームズ James Thurber 一八九四

一八九六一 アメリカの児童文学作家、エッセイスト。フランス大使館員として、約二年間パリに滞在した後、帰国して「シカゴ・トリビュン」紙などの記者となる。「ニュー・ Yorker」誌の編集員を経て作家の道に入る。以降、短編小説、エッセイ、劇作などを手がけ、子どもの本を五冊書く。『たぐきさんのお月さま』（一九四三）、『大おとことおもちややん』（四四）、『The White Deer 白こしき』（四五）、『The 13 Clocks 13の時計』（五〇）、『The Wonderful O すつきんオ』（五五）で、いずれも軽妙な笑いに満ち、最後の作品を除き、現代のフェアリー・テールといえる。とくに『たぐきさんのお月さま』は、我が国では最も親しまれ、大人のもつ形式主義や既成概念を鋭く風刺し、スロボトキンの挿絵とともに、コールデコット賞を受けた。サーバーは広い視野をもち、現実への洞察が鋭く、アメリカのユーモア、サティアアの担い手である。

（原 昌

血海達哉

たつやが

一九四二

（昭17）

児童文

学作家。大阪市生まれ。三歳から高校卒業まで広島県有磨村で過ごす。宮沢賢治によって児童文学への関心を惹き起こされ、東京学芸大学在学中はサークル「あかべこ」に所属して創作に励んだ。卒業後は、埼玉県および広島県で高校の教師を務めるかたわら、日比茂樹ら大学時代の仲間と同人誌「牛」に拠って活動を続

けた。一九七三年に長編『にせまつり』と短編集『少年のしるし』を刊行して一躍注目され、『チツチゼミ鳴く木の下で』（一九七六）で野間児童文芸賞推奨作品賞を、『坂をのぼれば』（七八）では旺文社児童文学賞・サンケイ児童出版文化賞を受賞した。少年少女の微妙な心理の動きを、日常生活における小さな、しかし子どもにとっては必ずしも小さくはないでき事や、周囲の人々とのさまざまな交渉を通じて鮮やかに捉える作風で、とくに短編の切れ味は鋭い。著作は一〇冊あまりある。

（長谷川 潮

更科源蔵

げんざん

一九〇四

（明37）

昭60）

詩人、児童文学作家、郷土史家、アイヌ文化研究家。北海道弟子屈町に生まれ、東京麻生獣医学学校中退。小学校代用教員、密猟監視員、牛飼いの編集者などを経て文筆業。一九三〇年第一詩集『種薯』により高い評価を受ける。詩集、紀行文、アイヌ文化史などの著書多数。児童文学作家としては、八三年刊『父母の原野』が自伝的要素の強い三部作の第一冊目として注目された。絵本作品もある。

（加藤多二

サルガリー

エンリリオ Emilio Salgari 一八六三

一八九一 イタリアの大衆児童文学作家。ヴェネツィア工業・航海専門学校に学んだ後、アドリア海、地中海航路の船員となる。その後、その経験を生かしながら、カリブ海、海賊の物語『黒い海賊』（二八九九）、

『Il figlio del corsaro rosso 赤い海賊の息子』（一九一〇）などの海洋冒険小説を数多く書いた。戦後になって M・スパニョールの注による全三巻の作品集（六九）が出た。（安藤美紀夫）

ザルツマン クリスチャン ゴットヒルフ Christian Gotthilf Salzmann 一七四四—一八一一 ドイツの牧師、教育家。エアフルト近郊ゼメルダに生まれる。イエナ大学で神学を修め、牧師となる。一時バセドールの汎愛学舎で宗教の授業を担当。一七八四年シュネプフェンタールに学校を設立し、とくに自然観察によって、子どもの感覚力、記憶力、想像力、悟性を育てる教育を実践し、独自の教科書『Moralisches Elementarbuch 道德基礎教科書』（一七八五）、『Conrad Kiefers ABC und Lesebüchlein コンラート・キーフアーの ABC 読本』（八九）などを著した。（田中安男）

ザルテン フェリクス Felix Salten 一八六九—一九四五 オーストリアの作家、劇作家。本名ジークムント・ザルツマン。ブダペストに生まれ、ウィーンで学ぶ。引き続きウィーンで劇評、戯曲、小説を書いた。一九三三年までオーストリアのペンクラブ会長。三八年アメリカに亡命。スイスで死去。『白馬物語』（三三）をはじめ動物物語に優れたものが多い。代表作は、森の茂みで生まれた雄鹿の成長を描いた『パンピ』（一九二三）。森の美しさや厳しさ、そこに棲む動物たちのい

たわりや激しい生存競争、また恐ろしい獵師の出没など、動物たちの生を自然の生態に沿って描きながら、しかも人生にも通うような心あるものの一生として物語っている。ディズニーによってアニメ映画化されたが、それは原作とはかなり異なったものになっている。

沢田 謙

けんだ 一八九四—一九六九（明27→昭44）
（上田真而子）

伝記作家。鳥取県生まれ、一九一八年に東京帝国大学法学部を卒業、東京市政調査会参事、太平洋協会参事、航空工業会参事などを歴任したのち、文筆生活に入った。第二次世界大戦以前より、「少年倶楽部」「少女倶楽部」などに偉人の伝記を執筆し、堅実ながら多くの読者の心をつかんでいた、数少ない伝記専門作家の一人である。作風は、記録に基づきながら、忠実にその人の一生を描き、かつ、作品として面白く読ませる配慮を凝らし、伝記の一つのパターンをつくりあげた。

戦後は、青少年少女向きの伝記に専念し、数十点の作品を残している。四九年の『リンカーン』をはじめとして『エヂソン』（四九）、『伊藤博文』（五二）、『コロンブス』（五八）、『明治大正昭和名婦伝』（五五）、『野口英世』（五六）、『勝海舟』（五二）、『ワシントン』（五一）、『福沢諭吉』（四九）、『湯川秀樹』（五二）など版を重ね、現在も読み継がれている。（二上洋一）

沢渡吉彦

さわたり よしひこ 一九一一—（明44—） 童謡・童

話作家。山形県南村山郡東沢村(現山形市)に生まれ佐伯栄養学校を卒業。処女作は一七歳の時野口雨情に選ばれた『朝露提燈』、以後野口雨情の知遇を得、葛原幽*、浜田廣介、国分一太郎らと親交を結び、童謡集『さくらんぼ』(一九三二)、『雪明り』(三三)などを出版。少年小説『ジョン万次郎』(四二)、『砂漠の下海』(四七)などの作もある。童謡誌『さくらんぼ』を長く主宰し、童謡一筋の情熱に生きている。
(植松要作)

サンギ ウラジミール・M Вадимир Михайлович
Сани 一九三五—ソビエトのサハリンに住む少数民族ニプフ人の最初の職業作家。オホーツク海沿岸の半漁半獵の家に生まれる。レニングラードの教育大学を卒業し、郷里で教師を務めるかたわらニプフの民話を採集、『*Нисские легенды* ニプフの昔話』(一九六一)を発表してセンセーションを呼ぶ。ニプフの語り伝えや豊富な観察をもとに多くの作品集、民話集がある。中編に『イズギンじいさん』(六五)、『*Лоскутый сон* いつわりの狩場』(六五)など。
(服部素子)

三国志 しさんてき 正しくは『三国志演義』のこと。明代初期の長編小説。全二四巻。魏・呉・蜀が争い、晋によつて統一されるまでの歴史を記した陳寿の『三国志』をもとに、宋代には語りものとして『三国志平話』があり、明代に至つてこれらの物語類を羅貫中が集大成したといわれる。魏の曹操、呉の孫権、蜀の劉備が覇

を争う。関羽、張飛、諸葛孔明らが劉備をもちたて、英雄たちが縦横に活躍する。また我が国でも、江戸時代から『通俗三国志』『通俗続三国志』などが流行し、波乱万丈の面白さゆえに青少年層にも読まれ、近代児童文学の大衆時代小説の系譜に影響を与えた。

(君島久子)

サンチエスシルバ ホセ・マリア José María Sánchez-Silva 一九一一—スペインの児童文学作家。スペインの首都マドリードの生まれ。家が貧しかった上に、早くに両親を失い孤児院暮らしを長く続けたが、独学によつてジャーナリストの道に進んだ。その後創作活動にも意欲的に取り組むようになったが、彼の名を一挙に高めたのは、『汚れなき悪戯』の名で我が国にもよく知られる『*Marcelino pan y vino* マルセリーノ、パンと葡萄酒』(一九五二)であった。この作品は幼いころに母から聞いた話を土台にし、修道院にいた一九歳の彼の娘サラにささげられたものだが、映画化されたことによつてその人気が国際的なものになった。そこにはスペインの風土、宗教的背景などが色濃く出ているが、彼はその後スペインを代表する詩人の一人ヒメネスの『プラテロとわたし』に刺激されて、『たぐいなきろばノン』(五二)や、『さようなら、ホセフィーナ』(六二)を書き、一九六八年に国際アンデルセン大賞を受賞した。
(安藤美紀夫)

サンテグジュペリ アントワヌ・ド Antoine de

Saint-Exupéry 一九〇〇―四四 フランスの小説家。

リヨン生まれ。美術学校入学を志望するが挫折、二一歳で航空隊に入って従軍。除隊後も民間航空のパイロット、郵便飛行士、スペイン戦争のルポライターを務めるなどの活躍と並行して、『*Aviateur* 飛行士』（一九二六）を皮切りに『夜間飛行』（三二）、『人間の土地』（三二）など、主に操縦士を主人公とする多くの小説を書き、一貫した明快なヒューマニズム、危機感に支えられた緊張とリリズムにより多くの読者を獲得した。第二次大戦中に自ら志願してパイロットとして従軍、一九四四年七月、地中海上空で愛機とともに消息を絶つ。児童文学作品としては、四三年に作者自筆の挿絵を不可欠の要素として刊行されたごく短い物語『星の王子さま』一編のみであるが、これは作者死後にわかに広く読まれるようになり、ほとんど世界的にサンテグジュペリの名を知らせるに至った。物語は、砂漠に不時着した孤独な飛行士が、どこかの小さな星から来たという不思議な少年に出会ってさまざまなことを語り合うという単純な設定により、一つの人生観・世界観が提示される仕組みになっている。この作品構造や思想に対しては批評家の間に多くの異論・異説があり、これは児童文学ではないとする酷評もあるが、簡潔で澄明な文章には魅力があり、愛読者を失う

ことはあるまい。

（天沢退二郎）

サンド ジョルジュ George Sand 一八〇四―七六

フランスの女流作家。本名オロール・デュパン。四歳の時父を亡くし、ベリー地方ノアンの祖母のもとで自然に抱かれて少女時代を過ごす。一八歳でデュドヴァン男爵と結婚し二児をもうけるが、平庸な夫に飽き足らず離婚、二八歳で单身パリへ出る。処女作『アンディアナ』（二八三三）をジョルジュ・サンドという男性筆名で発表。続いて『ヴァランチヌ』（三二）、『レリア』（三三）を書き名声を得る。このころ詩人ミュッセ、ついで作曲家のショパンと激しい恋をしたのはよく知られている。一八四八年の二月革命時には共和制成立に進んで力を貸した。この時期の作品では、一種の教養小説とも読める『コンシユエロ』（四二―四三）が力作である。やつと成立した共和制も反動化し、革命は民衆側の敗北に終わる。失望したサンドは、美しい自然の中の素朴な農民の生活に安らぎを見だし、一連の田園小説を書く。『魔の沼』（四六）、『捨て子フランソワ』（四九）、『愛の妖精』（四九）などはサンドの一〇〇にのぼる作品の中でも最高の傑作といわれ、バルザックは「サンドの手ではじめてフランスの田舎が描かれた」と絶賛した。晩年ノアンに帰ったサンドは、孫たちに『*Contes d'une grand mère* 祖母の物語』（七三―七五）二三編を書く。その中では『ばら色の雲』『ものいう

かしの木」などがルソーの影響の濃い児童観を描き出している。
(石沢小枝子)

山東京伝

さんとう
きやうでん

一七六一—一八一六(宝暦11—文化

13) 江戸後期の戯作者、狂歌師、浮世絵師。本名岩瀬醒。号を山東庵京伝、別号醒斎。江戸に生まれる。戯

作者として多彩な作品を残したが、一面近世風俗研究家として風俗考証を主とした『骨董集』や『近世奇跡考』を著述した。『骨董集』四冊、大田南畝序、刊行一八一四—一五年。晩年の作で上編のみである。一部に児童文化、文学に関する事項が扱われている。たとえば『祖父祖母之物語』『打出の小槌』『雑遊』『手鞠』『酸醬を吹きならす事』などがある。「童話」を「むかしばなし」と訓読し「童話考」を「どうわこう」と音読している。昔噺考証の点では『燕石襟恋』が勝っている。なお後刷本に数種あるらしい。
(滑川道夫)

シ

ジー モーリス Maurice Gee 一九二二— ニュー

ジーランドの作家。一般向きの長編三部作(『プラム』・一九七八他)でブラック・テート・メモリアル賞(英)受賞後、児童文学に転じ、非核の思想に裏づけされたSF三部作(『惑星Oの冒険』・八二他)を書く。地球規模の脅威を乾いた口調で語るが、若者の力に樂觀もしている。自国を舞台としない点、英米などで認められてからの成長はマーヒーも同じであるが、これはオセアニアの文学界の伝統の一つともいえる。
(百々佑利子)

ジェイコブズ ジョウゼフ Joseph Jacobs 一八五四—一九一六 イギリスの昔話研究者、作家。オーストラリアのシドニー生まれ、のちに渡英、ケンブリッジ大学で人類学と文学を修める。イギリス民俗学会の創立(二八七八)に尽力し、同時にイギリス・アイルランドを中心とする昔話集を数多く出版した。中でも、『イギリス昔話集』(九〇)、『続イギリス昔話集』(九四)、『ケルト昔話集』(九二)、『続ケルト昔話集』(九四)の四点がとくに有名であるが、いずれもリズム感にあふれた流麗な名文として知られる。これは、彼が、昔話とは元来語られるものであるという立場に立ち、方言や語り口をできるかぎり生かして再話したたまものである。しかし、彼が自ら『ケルト昔話集』の序文で断っている通り、『イギリス昔話集』では素材を集めることに苦勞したのに対し、『ケルト昔話集』では、集めた素材の中から公にするものを選択する方に腐心したとい